

台湾万葉集 (左:続)

日台稲門会 ニュースレター2月号 (2022年2月12日)

日台稲門会会員・会友の皆様

日台稲門会ニュースレター2月号をお届けします。

1. 挨拶 (三村達 会長)

寒い日が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

年明けにはコロナウイルスも漸（ようや）く鎮静化してきたかに思われましたが、ここに来て新たにオミクロン株が猛威を振るい始めております。

皆様におかれましては、お体に十分お気を付けていただき、お元気で過ごされますようお祈りいたします。



2. 日台稲門会春季講演会の案内

春季講演会を下記の日程で行いますので奮ってご参加ください。

◆演題：『台湾有事と日台関係』

◆日時：2022年3月26日（土）15時30分～17時30分

◆場所：中華民国留日東京華僑總會（同会事務所スペースをお借りしました）

中央区銀座6丁目13-6 3階

◆講演者：小笠原欣幸（東京外国語大学大学院教授）

講演後の懇親会については、現在のところ未定となっています。

3. 北京冬季オリンピック 出場選手

冬季オリンピックも後半になってきましたが、大会に出場する日本選手 124 名のうち、早稲田出身者は羽生結弦選手を含めて 18 名と 2 位の日大(8 名)を大きくリード。特に男子複合では選手 5 人全員が早稲田出身。萩原健司・次晴以来の伝統は生きていました。そして、台湾の出場選手は 4 名。毎年、野沢温泉で練習を重ね、日本大好きは何選手が競技トップ。頑張ってください。



(JIJI.COM より)

4. 台湾からの便り 台北稲門会より（斎藤征二さん）

今月の台湾斎藤さんからの寄稿です。非常に参考になる記事です。

半導体、「黄金の 10 年へ」 TSMC 董事長らが業界見通し

ファウンドリー（半導体の受託製造）世界最大手、台湾積体電路製造（T S M C）の劉德音董事長は 1 月 3 日、半導体産業の見通しについて「今後黄金の 10 年を迎える」との見方を示した。世界の半導体年産額は 2030 年までに、1 兆米ドル（約 113 兆円）を超える

可能性があるとみている。

劉董事長は、「新型コロナウイルスの世界的流行で、人類の生活や産業は一変した。巢ごもり需要の拡大で、本来であれば 10 年以上かかるデジタル転換がたった 1 年で進んだ」と指摘。今後 10 年における最も重要な発展はハイパフォーマンスコンピューティング（HPC）の応用と予測した。スマートフォンやスマートカー、スマート製造などの分野が、クラウドコンピューティングやビッグデータ分析、第 5 世代（5G）移動通信システムなどの高速通信を大幅に推進すると見通した。

また向こう 10 年で、半導体が処理できるデータ量が大幅に増え、通信速度が加速することで、メタバース（仮想空間）が実現可能になると予想。「業界では、拡張現実（AR）がスマホ、仮想現実（VR）がパソコンに取って代わるとみられている」と語った。

劉董事長は半導体微細化の物理的限界が近づいている点について、「これまでは微細化というトンネルに向かってまっすぐ走ってきたが、出口は近い。出口の外にはさまざまな可能性が存在している」と指摘。今後はシステムと応用の面でさらに広範な利益を生み出すことができると強調した。

半導体設計の大手、聯発科技の蔡董事長も、今後の半導体産業の見通しを楽観視している。中でも電気自動車（EV）やメタバースの発展が顕著だとして、電源管理 IC やセンサー、無線通信などに商機があるとの見方を示した。

25～30 年後には、量子コンピューティングの時代に突入すると予測。半導体業界にとっては、パソコン産業の黎明期よりもさらに大きな恩恵が見込めるとして、台湾も準備を開始すべきだと語った。

ところで日本を振り返ってみて「黄金の 10 年」と言えるような産業があるでしょうか。

1980 年代、日本が世界の半導体生産の半分近くを占めていた時代を記憶している者にとって、時代の移り変わりの激しさを痛感します。

転機は 1986 年の「日米半導体協定」であったと思いますが、大手電機メーカーの一部門であった半導体事業が金食い虫として利益率の低下とともに礼遇されるようになった例も

見て来ました。残念に思います。

これからは半導体製造装置・設備や、シリコンウェハー、フォトレジスト、高純度化学薬品、トップコート材料、CMP スラリーなどの高シェアを維持し、半導体全盛時代の「縁の下の力持ち」を演じることで「黄金の 10 年」の一翼を担って欲しいと思います。

5. 経済ニュース（劉彦甫 記者）

今月も劉彦甫さん（WTSA 出身で現在東洋経済新報社記者）の署名記事を紹介します。

■日本電産が「半導体のエース」獲得に秘めた真意

狙いは「EV 向けモーター」の安定供給だけか （2/3 東洋経済）

日本電産は、ソニーで技術インテリジェンス渉外担当執行役員を務めた大村隆司氏を半導体開発の副最高技術責任者として招く人事を発表した。同社はトラクションモーターは社内で作ってきたが、半導体に関しては調達を外部に依存してきたため、調達難や価格上昇の影響を受けている。それを自前で作ることで、次なる段階へと進むことができる。そのための重要な人事となるとしている。

https://toyokeizai.net/articles/-/508598?utm_source=author-mail&utm_medium=email&utm_campaign=2022-02-04

スマホ用⇒



■スマホ電池 1 位の TDK が明かす「電池の生存戦略」

石黒社長が断言「日本ありきの開発ではだめ」 （2/2 東洋経済）

バッテリーの重要性がますます高まっている現在、TDK はスマホ電池で世界トップシェアを持つ ATL（香港）を傘下に持つ。ATL は、親会社連結営業利益を上回る 1,474 億円を稼ぐ。ATL からスピノフした中国の CATL と組み、TDK はさらなる飛躍を目指す。その経緯について話を伺った。

<https://toyokeizai.net/articles/-/507576>



■スマホ出荷停止「バルミューダ」に問われる成長力

ガバナンスにも厳しい目線が向けられている

(1/15 東洋経済)

スマホ発売で話題を呼んだ、中堅家電メーカーのバルミューダ。製造委託先の京セラから日本の通信規格への適合に問題ありとの指摘を受けて、発売1カ月後に出荷停止となった。4日後に再出荷となったが、ブランドイメージの低下は避けられなかった。またスマホ以外に経営体制にも厳しい視線が向けられ、CEOの田中氏の辞任となった。「窯から出したばかりのパンの味を再現するトースター」で有名になり、2020年12月に上場したバルミューダの今後の経営について述べている。

<https://qr.quel.jp/tmp/1c36db9274805d0b94c4e0d3c6754822c321c4af.png>



劉記者の過去の記事一覧 下記サイトを参照

<https://toyokeizai.net/list/author/%E5%8A%89+%E5%BD%A6%E7%94%AB>



6. 最近の台湾関連ニュース

■米、台湾のミサイル改良へ装備売却承認

米国防省は、台湾の「パトリオット」などの維持、改良のための装備品（約115億円）の売却を承認した。（2/9 産経）

■台湾、日本食品の禁輸解除 近く発表 福島など5県産 （2/8 産経）

■台湾一極集中 もろ刃の剣に 半導体不足が招く米中衝突リスク

台湾に集中する最先端の半導体拠点が（2025年世界の生産シェア9割）、米中衝突の導火線になりかねないとして、米の経済安全保障の専門家らが危機感を強めている。（2/6 産経『日曜経済講座』）

■北京冬季五輪開会式でもNHKの「台湾です」に台湾好意的 日中報道を対比

4日、北京冬季五輪の開会式でNHKが、東京五輪と同様に今回も中華台北を「台湾」と呼んだことを台湾では好意的に報道。「しかし、中国国営中央テレビは『中国台北』と呼び世界をあざんとさせた」（自由時報）と対比して伝えた。（2/5 時事他）

■台湾有事「2024、25 年が山場」森本元防衛相

森本元防衛相は、オンライン会合で台湾有事にふれ、「2024、5 年に有事が発生した際に米国は日本の助けがないければ、インド太平洋で必要な作戦ができない。日本がどこまで協力してくるかを気にしている・・・」と。（2/4 産経）

■インド、北京五輪「外交ボイコット」 国境対立背景に

ガルワン渓谷でインド人兵士 20 人を殺害した中国の軍隊長が聖火最終走者となった為、インドは急遽、要人の五輪派遣を中止した。（2/3 日経）

■ 日本政府官邸、新年祝賀メッセージを始めて繁体字で発表

今年、首相官邸は、中華圏の春節に対する祝賀メッセージを繁体字でも発表した。ただし、繁体字版では、「日本が困っていた時、私たちに温かい援助をしてくれたことをずっと心に留めておきたいと思います」や最後の「虎（皆様）の幸せと健康を祈り、虎が新たな旅立ち（飛躍）されることを願っています」と簡体字版にはない表現をしたため、台湾では好意的に受け止められた。（1/28 総理官邸 HP、自由時報）

■特派員発

1月7日に台湾海軍が訓練の様子をメディアに公開し、国民への「防衛の意思」情報発信を強調。「中国が台湾を占領しても、全民皆兵の台湾国民は最後まで戦い続ける意志を鍛える」「中国の台湾への情報攪乱戦への警戒も強化する」としている。（2/4 産経）

■石原慎太郎氏死去

日本の台湾断交に反発し「青嵐会」を結成し（昭和 48 年の）、その後も終始台湾寄りだった石原慎太郎氏が 1 日に死去した。享年 89 歳。（2/2 各紙）陳水扁元総統は、「台湾の景勝地を日本へ紹介してくれ、日本人の台湾観光ブームをつくってくれた。また台湾の愛知万博参加、日本観光へのビザ免除、日台間の運転免許の相互承認などをしてくれた。台湾にとっても大きな損失」と哀悼メッセージを寄せた（2/3 産経）

■「27 年までに台湾を武力統一」 中国、米上回る軍事力

米中関係が専門でタカ派の金燦栄氏（中国人民大学教授）は、日本経済新聞の取材で、習近平指導部が（2 期目の最終年となる）2027 年までに台湾の武力統一に動くとの見方を示した。その根拠として、中国人民解放軍はすでに米軍を上回る戦力を保持しているとしている。（1/30 日経）

■ゼロか、ウィズか「優等生」台湾 オミクロン株感染急増で苦悩

台湾は1月にコロナ感染者が400名となり、そのうち9割がオミクロン株。ただし、感染ルートは解明されているため、蔡政権は「現時点ではまだゼロコロナの努力をしている」と述べた。（1/30 毎日）

■北京五輪 中国「中華台北」認める 台湾一転、開会式出席へ

中国が冬季北京五輪で「中華台北」の名称を維持することで台湾は式に参加。開会式には洪秀柱前中国国民党元主席が出席した。（2/3 産経）

■台湾副総統、米副大統領と接触、「外交上の大きな突破」

台湾の頼清徳副総統は、ホンジュラスのカストロ大統領就任式で、アメリカのハリス副大統領と接触。選挙中、台湾は、親中姿勢を示すカストロ候補に対して台湾との関係維持を望むと伝えていた。（1/29 産経）

■成長鈍化の中国、習氏が頼る台湾統一

慶応大学の細谷教授は、故高坂正堯氏の「感染症の病原菌を完全排除しようとする姿勢や純粋状態や道徳的理想郷を目指す試みは大抵失敗する」とした評論を紹介し、経済成長鈍化が大きく鈍化することに対して、台湾統一に国民の目を向けさせることがあると指摘した。（1/29 産経『世界を解く』）

■中国駐米大使、「台湾独立の道を歩むなら、米中軍事衝突に陥る」と米台を牽制

（1/29 産経 Web）

■蔡総統、「台湾守った」と蒋経国元総統を評価

民主進歩党が蒋経国氏を外来政権の代表として批判的であるのに対して、蔡総統は蒋氏を「北京当局の軍事的、政治的圧力に直面する中で台湾を守った」と強調し、あえて蒋氏を評価することで、台湾全体の結束をアピールしたようである。（1/26 産経）

■中国知識人、台湾武力統一に反対の声明

鄭也夫元北京大学教授（71）は、武力による台湾統一に反対を声明。米を巻き込んだ核戦争の危険を警告。（1/26 産経）

■狙うは台湾、習氏の焦燥

対岸うかがう「強国」の橋 迫る下り坂、爪隠せず

中国の威圧的行動の裏には、自信だけでなく、急成長から一転し、衰退国にへと向かう中国が垣間見られる。それを隠すため、台湾の許諾なく福建省から1時間半で台湾まで車で行ける橋の建設を開始したり、サイバー攻撃の活発化で世論を台湾侵攻へと目を向けさせざるを得ない状況になってきている。米タフツ大学のベックリー氏は戦前の日本を例に挙げて「台頭する大国歴史上、衰退期を迎えると、目標を達成しなければという焦りから攻撃的になる」としている。（1/25 日経）

■日仏「台湾海峡の平和重要」、2プラス2（外務・防衛閣僚会議）で一致

政府は、法的手続きを簡素化することで自衛隊と仏軍の共同訓練などを進め、1月に署名した日豪の「日豪円滑化協定」のように日仏の関係強化を狙う。（1/22 産経）

7. 早稲田大学台湾研究所講演『誰の日本時代』

1月29日（土）にYouTubeのリアルタイム配信によるオンラインセミナーがあった。

◆主催：早稲田大学台湾研究所（主催）、日本台湾学会定例研究会（共催）

◆登壇者：洪郁如（一橋大学教授）、北村嘉恵（北海道大学准教授）

◆内容

植民地時代の非日本語社会の人々について目を当てた『誰の日本時代』（洪郁如著）について北村教授が質問をするという会話形式で討議を行った。日本人が接触した日本語世代でなく、日本人との接触も少なく、日本語もほとんど習わなかった「周縁化された多数」（隔絶化された一般民衆）が如何に日本統治時代を生きたかについて歴史的見地から議論した。

8. 注目の台湾関連 TV 番組と本

■NHK 番組『路』

昨年好評になった台湾高速鉄道をテーマにした吉田修一氏原作の『路（ルウ）』が、NHK で4週にわたって新バージョンで再放送。2022.2/6～2/27 毎週日曜 BSP にて。
（写真：NHK より）



■『誰の日本時代: ジェンダー・階層・帝国の台湾史』(洪郁如)(法政大学出版局)

(税込 4,820 円) (2021 年 5 月 29 日刊)

台湾研究所セミナーで対談されたの洪郁如教授の本です。従来、日本語教育を受けなかった戦前の台湾の階層に焦点を当てて、彼らが如何に日本時代を生き抜いたかを取り上げている。学術論文をまとめたため、内容的には非常に難しいが、読む価値のある本である。

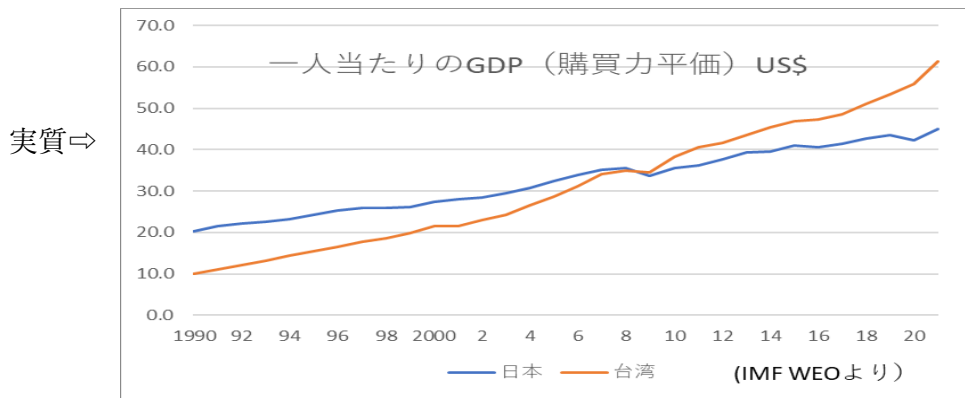


(一橋大学社会学部地域研究洪郁如ゼミより)

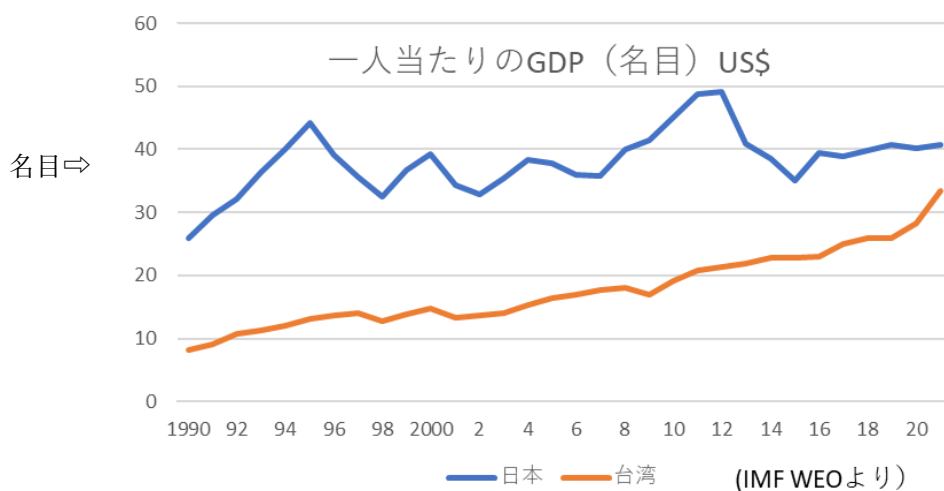
9. 台湾の人の豊かさ (橋本紀明)

台北稲門会の斎藤さんの記事を見ていたら、台湾の人の豊かさを調べてみたくなりました。巷では、コロナ後は、半導体、EV、再生エネルギーが強化されると言われ始めましたが、1990 年にバブルがはじけてからはや 32 年。失われた 30 年と言っている間に、台湾は着実に成長してきました。

国の豊かさは購買力平価で調べることができます。たとえば、ビッグマックはアメリカでは 1 個 5.81\$, 日本 3.38\$, 台湾 2.70\$ ですから、品質が同一なら台湾で買うのが、一番お得となります(『世界経済のネタ帳』2/5)。購買力平価は、実質国民所得と考えてよいと思います。台湾は、2009 年に一人当たりの GDP (購買力平価ベース) で日本を抜きました。2021 年現在、台湾はさらに引き離し、日本よりも 37% 豊かとなっています。



今後、半導体でさらに競争力が高まれば、名目 GDP ベースでも一人当たりの所得は（10年以内に）日本を超えると思われます。2021 年時点で日本の 82%。



編集後記

図書館に立ち寄ったら、90 年代に有名になった孤逢万里（呉建堂さん）作『台湾万葉集』（表紙写真）が目に入った。当時、マスコミで評判になるや否や、購入したことを思い出した。ただ、私には難しすぎて本棚に並べて置くのがやっとだったが、それもいつの間にか姿を消した。今回、手に取って読んでみたら（昔と違って）すっと頭に入ってきたが、同時に半端でない台湾知識人の造詣の深さに頭が下がった。

台湾の歴史あらわす万葉集本の端からにほひただよう （橋）